究極のアクティブ・ラーニング教育としての「ミニ移動大学」教育

“The mini Nomadic University” Education As Ultimate Active Learning Education

國藤　進[1]
Susumu KUNIFUJI

キーワード：移動大学，W型問題解決，フィールドワーク，地域創生，意識改革
Key Words：The Nomadic University, The W-shaped Problem Solving, Field Work, Regional Revitalization, Mind Innovation

1．アクティブ・ラーニングとしてのフィールド教育

中教審答申によるとアクティブ・ラーニングとは「教員と学生が意思疎通を図りつつ，一緒になって切磋琢磨し，学生が主体的に問題を発見し，解を見出していく能動的学習」のことで2020年までに，高校や大学の教育システムに定着するように指導することになっている．発見学習，問題解決学習，体験学習，調査学習がそのカテゴリーに含まれるが，グループ･ディスカッション，ディベート，グループワークも有効と菱村幸彦は指摘している．

本小論では，川喜田二郎（KJ：Kawakita Jiro）によって1969年に開始された「移動大学」[2, 3]が究極のアクティブ・ラーニング教育であることを，最近9年間の「ミニ移動大学」運動［8］をとうして実証する．フィールドという現場を学生が体験することが，問題意識を涵養し，かつ住民と行政のファシリテータを演じることで，地域創生の方法論としても機能することを紹介する．

最後に21世紀知識基盤社会のイノベータになるには，多様な知識を深く学習することのみならず，多くの創造的問題解決のスキルを学ばなければいけないことを，ハーバード大学のハワード・ガードナー教授の多重知能理論［4］の観点から考察する．

2．移動大学とW型問題解決学

移動大学［2, 3］はKJによって，W型問題解決学という方法論［1］を「日本列島を教科書に」学んでいこうという壮大な構想の一環として生まれた．著者はその第一回「黒姫移動大学」の参加者である．また移動大学の教科書にすべく，黒姫移動大学Bユニット・リーダー牧島信一氏と組み，「問題解決学KJ法ワークショップ」［1］を執筆した．この本は23版まで出版され，当時ベストセラーとなった．

さて移動大学のモットーは「一，創造性開発と人間性開放；二，相互研鑽；三，研究即教育・教育即研究；四，頭から手までの全人教育；五，異質の交流；六，生涯教育・生涯研究，七，地平線を開拓する；八，雲と水と」である．移動大学は20世紀中に二週間の本格版18回，縮小版4回の計22回行われたが，1999年を最後に開催されていない．

もう一つの要点はW型問題解決学の進展である．人間の創造的問題解決は個人であれグループであれ，共通のプロセス・モデルが存在するというのがKJの主張である．筆者らは多くの移動大学の

[1]北陸先端科学技術大学院大学

参加者・主催者の経験から，W 型問題解決のプロセス・モデルを次のように微修正［6］した．①課題提起ラウンド R1，②現状把握ラウンド R2，③本質追求ラウンド R3，④ネガ・ポジ変換本質追及ラウンド R3.5，⑤構想計画ラウンド R4，⑥具体策ラウンド R5，⑦手順の計画ラウンド R6，⑧実施ラウンド R7，⑨本質検証ラウンド R8，⑩振り返りラウンド R9 である．特に地域や組織の絡む問題では，R3.5 ラウンドの導入が必要であり，どのようなネガティブな本質もポジティブに表現し直し，元気の出るポジティブな課題解決提案をしていくことが必要である．

３．「ミニ移動大学」教育のねらい

北陸先端科学技術大学院大学（JAIST：Japan Advanced Institute of Science and Technology）では，移動大学経験者の手弁当の応援を経て，2008 年以降，毎年夏休みに 1 回，ミニ移動大学［8］を開催しており，既に総計 9 回行った．最近の 6 回は夏休み四日間で行っている．学生の役割は住民と行政をつなぐファシリテータに徹することで，住民が動くための起爆剤となることである．その基本スケジュール［7, 9］は以下のとおりである．

初日（R1）：それぞれの町内の課題を明確化するための予備的フィールドワークの日である．午前中，町内会有志の案内で，それぞれの町内を歩き，ふと気にかかることをメモし，写真をとる．午後に課題提起図解を作る．夕食後，ワークショップⅠ［7］を行う．町内会有志の前でその図解を外の目からみた内容として発表する．住民と学生は徹底的な議論を行うことで，アクティブ・ラーニングのセンスが双方ともに養われる．最後に町内会有志は，住民の視点で何が最重要の課題であるかを評価する．

二日目（R2）：午前中から午後にかけて，院生は本格的なフィールドワークを行う．初日ワークショップの住民の評価に基づき, 現状把握のための写真を撮りまくり, インタビューを行う．スマホ等で撮った全ての写真は小型サイズで印刷する．この写真を用い，写真 KJ 法を行う．写真をもとに KJ 法の要領でまとめたのが現状把握図解である．

三日目（R3.5）：現状把握図解を見ながら，参加院生が集中的に地域活性化案を提案する．地域活性化案はアイデアイラスト図［7］として一人 3－5 案提案する．この日は朝から晩まで，3.5 ラウンドの KJ 法に集中する．

四日目（R3.5&R4）：午前中に 3.5 ラウンドのアイデアイラスト図解を完成する．午後は学生と住民とのワークショップⅡ［7］である．このワークショップでは真剣な議論が行われ，課題解決の提案が吟味される．まさに双方ともに真剣に議論する．最終的には，地域再生のための簡易ロードマップを住民に作成していただく．評価と発表はあくまで住民側である．

もちろん住民側のロードマップが動くためには事前の調査・打ち合わせや事後のフォローアップが重要である．

大学院大学にふさわしい座標軸的教養として，どのような領域の問題にも適用できる創造的問題解決の方法論を，学生はミニ移動大学［8］で学ぶ．その効果も大きく，例えば課題発見力，アイデア生成力，チームワーク力，プレゼンテーション力，ディベート力などのアクティブ・ラーニングで必要とされるスキルを獲得することができる．

４．「ミニ移動大学」運動の三種の教育効果

4.1.　院生意識改革

参加した院生が CommInnovation や Eureka という学内コミュニティ［9］を創設した．2009 年創設の前者は先輩が新入生を歓迎する「さくら祭り」（四月入学生）や「もみじ祭り」（十月入学生）とな

り，全学行事となった．後者は留学生の異文化交流サークルとなった．

「ハタブネ・コンサルティング」という院生 4 人からなる猪のジビエ料理の会社［9］が立ち上がり，羽咋市の支援で猪の解体工場を作った．その代表の吉村祐樹は金沢中心部の寺町に，猪の皮を使った財布やバッグ，および猪の爪を利用したキーホルダーの店を 2016 年 9 月に開店した．地元のしいのき迎賓館の「ジャルダン　ポール・ボキューズ」では，能登シシなどの能登の食材を使ったフルコースのフランス料理を提供している．

図1　能登しし

図2　イノシシ・レザーの加工品

4.2.　住民意識改革

能美市泉台町では NPO「えんがわ」（中川八郎代表）が立ち上がり，地産地消のスーパーを展開している．志賀町西浦地区の住民は NPO を作り，「秋の収穫祭」を行った．

能美市の粟生町や大成町といった問題意識の高い町内会役員のいる町では，最後のワークショップⅡで決めた実行計画表に基づき，いくつかの活性化プランを実行した．これはこの計画の評価主体が住民だったからである．

町内会と JAIST の協働作業も動いた．例えば辰口図書館「合格図書館」への JAIST 院生の学習支援協力が継続している，灯台笹・岩本町の「竹の子祭り」への応援，両町の JAIST 向け「収穫祭」が開催された．

4.3.　副産物の創造

2015 年度は宮竹町宮本酒造と協力し，宮本酒造の純米吟醸「夢醸」をベースに，JAIST 初の公認グッズである純米吟醸「先端」［9］を院生の原田　祥がラベル製作した．ラベルのネーミング，商標登録，デザイン，PR 戦略等で工夫し，JAIST のもつ「デザインの力」でどれだけ売り上げが伸びるかを模索している．「先端」は「地酒で乾杯！」の風土に合い，フルーティでおいしいと各種エベントでふるまわれ，好評・販売中である．

2016 年度は寺井町の和菓子屋「日本堂」髙田敦司社長の協力で，世界初の「もちもちカステラ」［9］を創作してもらった．このカステラは“日持ちすること，地元の特産品であるユズを使うこと，西洋の知と東洋の知の融合，ハラル対応，世界初の創作和菓子”という我々の提案するコンセプトのもと，髙田社長の熱意で製造された世界初の「もちもち感，しっとり感」のある創作カステラである．多くの女性陣の三回の試食に伴う，評価のフィードバックを経て改善・完成した．「ミニ移動大学 2016」終了後，院生の岡田侑里のラベル提案を参考に，プロのデザイナーが商品のパッケージを完成した．このカステラのパッケージには JAIsweets というロゴが記載されている．

図3　純米吟醸「先端」

図4　三種の創作和菓子

5．知識とスキルの教育の統合へ

アメリカのイノベーションファーム IDEO からスタンフォード大学に流れたデザイン思考［5］は，実は日本の自動車産業の方法論である W 型問題解決学を学んで方法論化［6］したものである．大学・大学院教育のベクトルがシフトしつつある．一つは知識のみならずスキルも教えるアクティブ・ラーニングの導入である．「ミニ移動大学」は最初の 7 年間は筆者の「副テーマ」として行った．この 2 年間は希望者も多くなり，JAIST の夏休み集中「講義」として行った．

多重知能理論［4］では，知識の学習もスキルの獲得も人間の「知能」の一種とみなす．多重知能理論の観点から「ミニ移動大学」参画の効果［9］をまとめると次のようになる．

① 言語的知能：発想力を活かしたラベル作り
② 論理数学的知能：ラベル集め，表札づくり，階層化，関係性の発見
③ 音楽的知能；エベントや祭りの企画と歌い手，楽器演奏での参画
④ 身体運動的知能：フィールドワークでの身体運動力
⑤ 空間的知能：フィールドワークおよびワークショップでの観察力
⑥ 対人的知能：チームワーク力
⑦ 内省的知能：KJ 法 A 型図解および全プロセス終了後のリフレクション

社会人になった際に配属先のフィールドで遭遇する問題は，特定の専門分野の知識とスキルのみで解決できる問題は極めて少ない．問題の派生しているフィールドをじっくり観察し，そこから関連地域・組織を活性化するアイデアをスケッチで提案するやりかたが有効である．W 型問題解決学の本質を四日間で経験さす「ミニ移動大学」は多重知能理論の必要性を体感できる最高の教育機会である．

要約すると，ミニ移動大学参画で学生のみならず住民の意識改革が促進された．学生がフィールドに行き，観察する中で本当の課題解決の経験を積むことが重要である．深い知識とたくましいスキルを獲得することが，社会人になっても有用な究極のアクティブ・ラーニング教育である．

【参考文献】

［1］川喜田二郎・牧島信一著：問題解決学　ＫＪ法ワークブック，講談社，1970

［2］川喜田二郎編著：雲と水と　移動大学奮戦記，講談社，1971

［3］川喜田二郎編著：移動大学，鹿島研究所出版会，1971

［4］ハワード・ガードナー：MI：個性を生かす多重知能の理論，新曜社，2001

［5］トム・ケリー：発想する会社，早川書房，2002

［6］國藤　進：創造思考とデザイン思考の統合としてのアクティブ・ラーニング，“情報教育セミナー2015”，ニッショーホール，2015

［7］山浦晴男：地域再生入門―寄りあいワークショップの力，ちくま新書，2015

［8］川喜田二郎記念編集委員会編：融然の探検，清水弘文堂書房，Kindle（Amazon），2016

［9］國藤　進，山浦晴男，三村　修，白肌邦生，由井薗隆也：ミニ移動大学　三つの効能，日本創造学会第 38 回研究大会論文集，pp.22-25, 2016

（2017 年 1 月 10 日受付）

（2017 年 1 月 19 日採録）